

# 現代学生の本離れ

大内 田鶴子\*

## はじめに

本をよく読む学生はパソコンもよく利用するということを、私たちは経験的に知っている。果たして、江戸川大学生は江戸川大学の優れた環境である、図書館とIT基盤を使いこなしているだろうか。このような視点からみると、参考になる調査結果と卒業論文を得られたのでご報告したい。

表記の題名は、平成16年度経営社会学科、第1回卒業生である篠田卓也君の卒業論文名である。拙稿は、彼の論文の論点を短く整理し、加筆することにより作成した。調査と卒論指導の経緯は次のようである。平成13年(2001年)から2カ年間江戸川大学共同研究費をいただき、神田神保町の調査を行った。この調査は街づくり、地域活性化の観点から実施されたものであるが、どのような人々が来街しているかを知る必要から、平成14年(2002年)に三省堂前と岩波書店前の2地点を借りて来街者調査を行った。この時、調査員として動員したゼミ生とともに、合わせて江戸川大学学生の読書に関する調査を実施し、両調査結果を比較して卒論を書くよう指導した。

本調査は、調査対象の選定や実施の時期など制約の中で行われたもので、結果についての統計的客観性についてはまったく自信のないものであるが、経験や直感に訴えかける知見を得られたので紹介したい。なお、調査実施の概要は下記のとおりである。

## 1. 読書調査と結果の概要

調査の目的：学生の読書離れが進んでいると思われるため、一般社会の読者の傾向と比較し、実態を把握する調査を行なう

調査対象者：神田古本まつり来場者、及び江戸川大学学生

有効回答数：神田 517 サンプル、江戸川大学 231 サンプル

調査方法：神田古書店街は来場地点における自記式、江戸川大学は部、授業、ゼミなどに配布回収

調査地点：神保町交差点際岩波書店前、駿河台下交差点際三省堂ビル1階入口、江戸川大学キャンパス

調査期間：平成14年11月1日～11月3日  
 神田書店街 11月1日・2日 青空古本市期間  
 江戸川大学 11月2日・3日 学園祭およびその後の授業など

### (1) 神保町来街者調査結果

以下に主な知見を要約する。

- 来街者の約7割が男性であった。
- 来街者の年齢は20代から60代以上まで各層が来街している。
- 来街者の居住地は都内が過半を占め、後の半分は神奈川、千葉、埼玉など近県からの来街が多いが、7.4%は兵庫県、青森県など全国から来街している。
- 来街者の職業は、会社員・公務員が32%、

\* 江戸川大学 経営社会学科助教授 地域活性化論、都市社会学

キーワード：神保町、大学生、読書、IT

- 学生が21.5%，無職が16%，主婦・パートが10%であった。
- 最近1ヶ月の購買金額は平均で、12,528円であった。全購買者のうち、小説・エッセイを買った人が58%で最も多いが、2位は研究・専門分野で44.5%の人が買っている。また、研究・専門書の1人当たり購入額は12,229円であった。
- 来街者の1年間の本代は1~5万円が35.6%，5万円以上が35.4%である。
- 本の購入先は、自宅近くの本屋が55.1%，都心の大型書店が38.1%，通勤・通学途上の本屋が33.5%，古書店街が32.9%であった。
- 回答者の約7割は、「本は絶対に必要」と回答しており、「必要」とする回答は全体の97%にのぼっている。
- 活字情報源は、新聞が71%で最も多く、次いで書籍が65.9%で雑誌より高い値を示した。
- 古本まつりに来た回数は、6回以上の人が33.9%で、3回以上の人を合計すると、全体の6割近くを示している。

年齢、職業とのクロス集計結果で注目された知見を要約する。

- 年間の本代は30歳代が最も多かったが、全体としては年齢が高いほど高額になる傾向がみられた。
- ジャンル別分析では、年齢が低いほど「漫画」「雑誌」を好む比率が高く、年齢が高いほど「趣味・実務」「研究・専門」の比率が高い傾向がみられた。
- 本は「絶対に必要」と回答している人を職業別に分析し、「絶対に必要」としている比率の高い順に示すと、  
自営業>主婦・パート>自由業>教員・専門職>無職>会社員・公務員>学生という順番になった。

## (2) 江戸川大学学生調査結果

- 回答学生は、専門学校生・短期大学生を含むが、67%を江戸川大学生が占める。

- 学生の年齢は19歳が35.5%，20歳が28.1%で多く、男子学生が61.3%である。
- アルバイトについては、年間50万円以上収入を得ている学生が39.1%，100万円以上稼いでいる学生だけで見ると12.7%いる。
- 本が好きと回答した学生は76.0%である。
- 好きな本のジャンルは漫画67.4%と雑誌68.3%である。
- 最近1ヶ月に購入した本のジャンルは最も多いのが雑誌で62.6%，ついで漫画44.1%である。小説・エッセイは26.4%である。
- 江戸大生の1年間の本代は1,000円~5,000円が39.7%で最も多く、次いで5,000円~10,000円が31.4%である。その大部分は雑誌の購入に当てられていると推測される。
- 教科書の購入については、ほとんど買わない学生が12.8%，必ず買う学生が47.1%である。
- 図書館の利用はよく利用する学生が14.0%，時々利用する学生が49.8%，あまり利用しない、ほとんど利用しない学生を合わせて36.3%である。
- 本の必要性について、「絶対必要」20.3%，「必要」60.4%，「それほど必要ではない」17.6%，「必要ない」1.8%であった。
- 活字情報源では、雑誌が60.3%で1位、新聞50.4%，書籍32.6%，インターネットが28.6%で書籍に迫っている。

## (3) 神田神保町来街者と江戸川大学生の比較考察

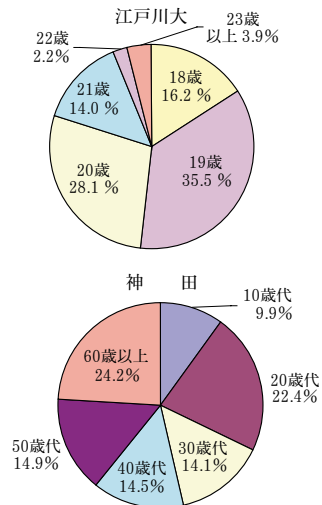
次に、江戸川大学での調査結果と神田での調査結果を比較し、違いが見られた点について要約する。なお、図の下に付けられているのは篠田君の解釈である。

- 調査対象の年齢がかなり異なるので取り上げておくと、江戸川大学生は18歳~21歳でほとんどを占めるが、神田は60歳以上24.2%，20歳代22.4%，50歳代14.9%，40歳代14.5%，30歳代14.1%，と各世代均等に近い回答者がいる(図1)。
- 好きなジャンルについては、江戸川大学生は

雑誌，漫画が高い割合を示すのに対して，神田では漫画，雑誌は低く，小説・エッセイが1位，研究・専門が2位，趣味・実務が3位になっている（図2）。

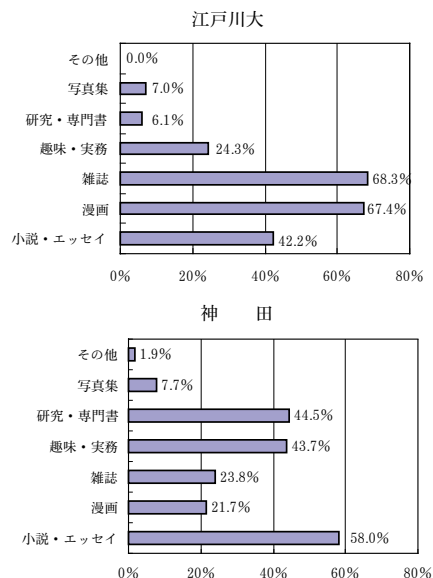
- 最近1ヶ月の実際の購買について見ると，江戸川大学生は62.6%が雑誌を買っており，次いで44.1%が漫画を買っているが，神田では，最も多くの人が購入したのは小説・エッセイで51.6%，次いで研究・専門書41.1%，趣味・実用書40.5%，その後に雑誌36.1%となる（図3）。
- 1年間の本代では，江戸川大学生の多数派が1,000円～10,000円で71.1%を占めるのに対して，神田では多数派は10,000円以上が71.0%を占め，そのうち50,000円以上の人が35.4%である。篠田君は学生と社会人の収入差として解釈しているがはたしてそうであろうか（図4）。
- 本の購入先で異なることは，「東京・新宿・池袋などの大型書店」「郊外の古本屋」「古書店街」という回答が江戸川大学生で非常に少ないことである。特に大型書店という回答が神田38.1%に対して，江戸川大学生では5.7%しかない（図5）。
- 図書館の利用についても「よく利用する」という回答者の割合で差異がある。神田は39.4%であるが，江戸川大学生は14.0%である（図6）。
- 本を読むきっかけとして，どちらも「本屋や図書館で発見して」が最も多いが，差異がみられたのは，神田のほうで，回答の「その他」の欄に「好きだから」「読みたいから」など内的な欲求を記入してきた人が多かったことである（図7）。
- 本の必要性についてはさらに大きな差異がみられた。本は「絶対に必要」と回答した人の割合は江戸川大学生で20.3%，神田で68.5%であった。また，「必要ない」という回答者は，江戸川大学で1.8%，神田は0%であった。「それほど必要ない」も合わせると，江戸川大学生では，19.4%であるのに対して，

図1 年齢



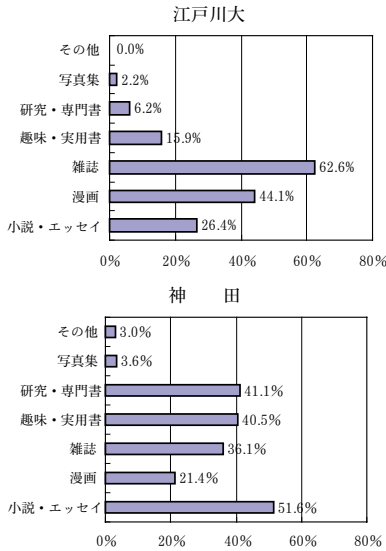
江戸川大学生の場合，19歳が35%，22歳以上の割合が少ない結果となった。神田は，20歳代と60歳以上の割合が共に20%以上，もっとも少ないのは10歳代の9.9%。結果の要因としては，江戸川大学生は，学園祭での調査も含まれていて，大学4年生の参加の少なさが結果の要因としてあげられる。神保町の場合も，伝統ある古本祭りへの参加は主に本好きの大人たちが多く，10歳代の割合が極端に少なかった。

図2 好きなジャンル



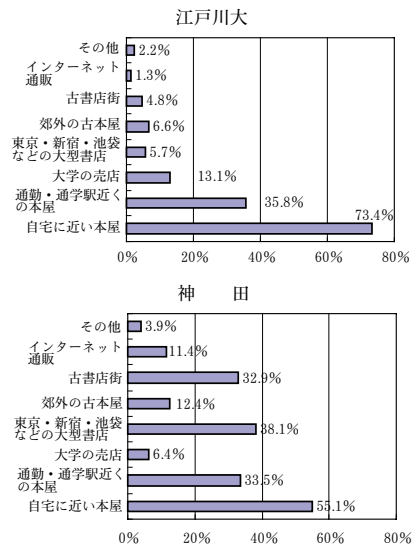
江戸川大学生の場合，漫画，雑誌，共に6割以上と頭一つ出ているが，いかに学生が，その他の本に興味を示していないのが伺える。逆に神田の場合，「漫画」「雑誌」以外のジャンルにほぼ均等に分かれていた。さすがに古本祭りの来場者だけあり，活字中心の本を好んで読んでいることが伺える。

図3 ジャンルごとの購買の有無



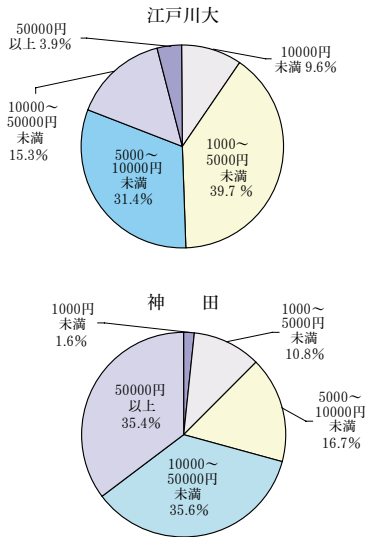
ここでも江戸川大学生の場合は、「漫画」「雑誌」の2つに集中している。特に雑誌の購買が学生の場合、62%と目立って高い。逆に神田の場合は、小説・エッセイに51%、研究・専門書・趣味・実用書の2つが40%以上と、やはり、活字主体の本を好んでいることが分かる。

図5 本の購入先



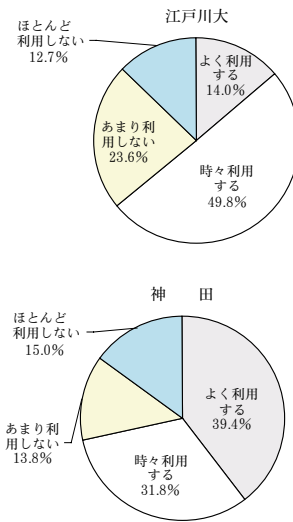
江戸川大学生、神田の両方とも、自宅に近い本屋が55%と大きく占めている。さすがに神田の方は、古書店街32%と多い。江戸川大学生の場合、通勤・通学駅近くの本屋が35%と多く駅などで本を買っている場合も多いことが分かった。

図4 1年間の本代



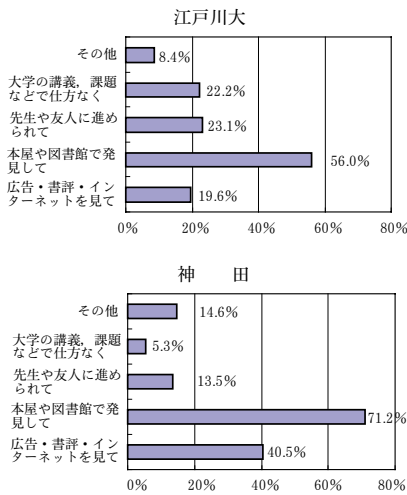
江戸川大学生の場合は、1,000~5,000円未満が39%、5,000~10,000円未満が31%と、この2つにもっとも集中している。神田の場合は、10,000~50,000円未満、50,000円以上が共に35%と集中している。読書好きが多い、神保町ならではの結果かもしれないが、学生と社会人による収入の差が大きなポイントである。

図6 図書館の利用



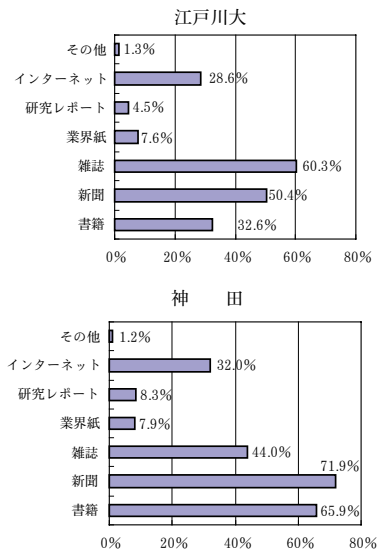
江戸川大学生に関して、よく利用する14%、ときどき利用する49%の差が激しいことから定期的にはなく、暇があれば利用するという潜在的な意識を感じる。神田の場合は、この2つの差はほとんどなく、本当によく図書館を利用していることが分かる。

図7 本を読むきっかけ



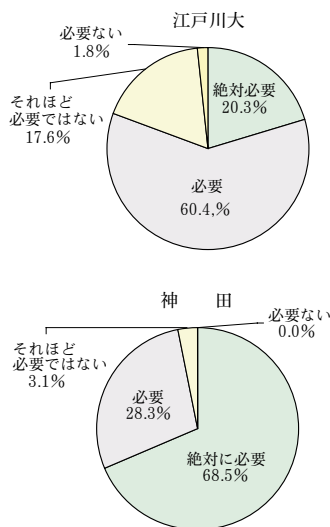
本屋や図書館で本を発見して読んでいる割合が、江戸川大は56%、神田は71%と多い。決定的な違いは、江戸川大の場合、本屋や図書館で発見して以外の回答は平均的である。神田の場合、その他の欄に「好きだから」「自分が読みたいから」など、個人の自主性を強調した回答をしている人が非常に目立った。行き当たりばったりで本と出会うのではなく、まず読みたいという欲が神田来街者の人には感じられる。

図9 活字情報源



江戸川大学生の場合、雑誌などが50%以上であり、神田の場合、新聞、書籍の2つが65%以上であった。この結果、「好きなジャンル」「1ヵ月のジャンルごとの購買」そして、「活字情報源」の3つに関しては、江戸川大、神保町とも、好みの共通点がはっきりと分かる結果となった。

図8 本の必要性



江戸川大学生は、「必要」が60%以上を占めているが、神田の場合、「絶対に必要」が68%以上を占めて、「必要ない」が0%と、本に対する愛着の強さに決定的な差があることが分かる。逆に江戸川大学生は、「必要ない」が1.8%いる。IT時代の到来によって、本の存在は必要ないと答える学生がわずかでもいることが分かった。

神田では3.1%であった(図8)。

- 活字情報源については、江戸川大学生では雑誌が最も多くて60.3%、ついで新聞が50.4%次いで書籍32.6%、インターネット28.6%であったのに対して、神田では新聞71.9%、書籍65.9%、雑誌44.0%、インターネット32.0%となった。江戸川大学生の主たる活字情報源は雑誌であり新聞と回答した学生は半分である。神田では71%が新聞を活用し、66%が書籍を活用している。インターネットにおいてさえ、江戸川大学生は神田の回答者より活用している割合が低いのであった(図9)。

## 2. 篠田卒業論文

「私はどちらかと言えば、本を読まないタイプの人間である。理由はさまざまだが、字を読む行為自体が昔から好きでなかった。根が面倒くさがり、字を飛ばして読んでしまう癖がある。……読むといえば、漫画と絵本である。」と序文に述

べられているように、彼はごく平均的な江戸川大学生である。自己の感覚に素直に書かれた卒論の要点を以下に要約する。引用のかぎ括弧は省略する。

### (1) 現代学生にとっての本

大学に入学し、はじめて授業で課題を出された。教授は図書館を使い、本によって必要な情報を引き出すといいと学生にアドバイスしたが、それを実行した学生は少ない。わざわざ図書館に向き、本を探し、さらに本から必要な情報を探すよりも、インターネットで検索して情報を引っ張り出したほうが早いからだ。現代はこの「楽に現象」によって変わろうとしている。と篠田君は述べている。図書館は調べたり、学んだりするところであるよりも、寝たり、休んだり、暇つぶしするところとして利用している学生が多いことを指摘している。彼の経験からして、本を読まない人は、本を読んで数十分もたたないうちに飽きる、という。ましてや、これが授業や課題などで『読まされている』本ならば尚更飽きやすいはずだ。そこへきて、この図書館の静かな環境だ。2時間は集中するはずだったが……読み始めて数分であくびがでて、数十分で本を置いた。

その理由として、活字よりも映像慣れしていること、多忙感におそわれてゆっくり考えないことをあげている。私たちの親が幼少時のころ、おそらくまだテレビ、ビデオなどの映像文化はそれほど栄えていなかった。ゆえに、知的欲求が本にいきやすかったと考えている。……しかし、私たちが幼少の頃……知的欲求は、本ではなく、分かりやすい映像表現に向いてしまったのではないだろうか。ひたすら詰め込むだけの受験専用の教育が、本を読まない子供をつくってしまっていると考えられないものだろうか。……勉強にも遊びにも時間を気にする。再び私の体験談で恐縮だが、課題や試験勉強に縛られているとき、実際に課題や試験勉強をしていないのに、ものすごく忙しく感じてしまう時がある。……こうした多忙感が起こる原因として、我々が経験してきた受験専用学習が背景にある。少しでも手っ取り早く、ひとつでも

余計に、頭に詰め込むのが大事で、ゆっくり自分で調べたり、疑問を持ったりという簡単なことでさえできなくなっているのかもしれない。必要ないから、効率がよくないから読まない。

### (2) 活字離れの現実

実際、篠田君の検索によると、東大学生は教養書よりも漫画のほうを好んで「読んで」いる。学生生活実態調査委員会の調べでは、東大学生の読書冊数は平均78.2冊（4月から8月までの8ヶ月で）、全体の読書冊数に占める本の種類の割合は、漫画が36.2%、教科書が24.2%で、この二つで6割を占めた。一方小説は18.6%、教養書は12.4%であった。委員長は「狭い意味での勉強と、まるっきり娯楽の漫画に分かれ、一般教養書を読まなくなっている」と分析している（2001.12.9毎日新聞）。

また、毎日新聞の読書意識調査では、小学生に関しては「読書離れ」していないものの、中学・高校生になると確実に「読書離れ」の傾向が見られる。2001年のデータでは、高校生の1ヶ月平均読書数は、1.1冊で、2000年の1.3冊から、0.2冊減った。1ヶ月不読率（1ヶ月間に1冊も本を読まなかった児童・生徒の割合）も、8.2ポイント増えている。活字離れの理由は多い順に掲載すると「本よりテレビやビデオの方が面白いから80%」「本より漫画のほうが面白いから51%」「受験勉強に忙しいから30%」「文字ばかりの本はうっとうしいから27%」となっている。

ちなみに、江戸川大学の学生では、篠田君は、両親や先生から読書することが勉強につながると教わってきており、「読書」について教養主義的、精神主義的イメージを持っているが、今回の江戸川大学生のイメージである「暇つぶし」「情報収集」という回答に共感を持ち、本についてこの程度にしか思っていないことについて「私は残念なことだとは、正直思っていない。時代の申し子たちの当たり前の声だと思っている」と述べている<sup>(1)</sup>。

### (3) IT化の問題

近年オンデマンド出版など本の電子化が進んでいるが、卒論では読む行為にとっての使いやす

さから印刷本と電子媒体本の比較を行っている。彼によると、情報検索という点では、印刷本は図書館へいく、または本を調達する、そして本の中から調べるといった二つの作業がある分面倒くさい。電子媒体の場合は膨大な情報量のなかからキーワードで短時間に検索できるという利点がある。さらに最新の情報の場合、電子媒体にはインターネットがあるので、それが最新の情報を提供してくれる。本の内容はしばしばふるくなり陳腐化している。

情報入手行動では、本のほうが情報の存在感、質感がある。また、耐久性が電子媒体に勝る。しかし、その蓄積量については本かさ張り、電子媒体のほうが再生機器を含めても場所をとらない。

携帯性については本のほうが優れている。燃料切れということがなく、また丈夫である。さらに、その本自体に書き込みが可能で、ふせんを貼るなど自由度が高いのが本の魅力であるという。

視認性においては、長時間ディスプレイを見続けることは難しい。読む抵抗を感じ、目が疲れる。また、携帯性がないため椅子に座ってみるなど身体規制もある。本に最も劣る部分としては、直接性がないことはいまでもない。本は一冊一冊個性をもって編集装丁されており、存在自体がひとつの情報であるが、電子媒体は同じ規格でつくられた金属とプラスチックの箱を通じてしかよむことができない。

電子媒体の場合、アニメーションなどの映像や音楽で伝えることができ、分かりやすく楽しむことができるという。また、複製、引用が容易であり、不要になれば削除による処理も簡単である。これこそが、活字離れ最大の原因のひとつではないかと彼は推測する。現代の学生にとっては他メディアとの競合のほうが「読書離れ」の原因であるとみることができる。

電子媒体は、利点は肝心の読む行為ではなく、むしろ調達する行為に利点があり、欠点は使い勝手に関することが多い。電子媒体こそ幼少より馴染みのある媒体なのだが、字を読むという行為を電子媒体で行っていなかったから、本を読む行為としては、電子媒体に抵抗がある。しかし、印刷

本で読む訓練を受けたともいいがたい。ディスプレイから活字を得ることと、紙の本から活字を得るのでは、間違いなく本から活字情報を得るほうが覚えが良い。この感覚はどこからくるのだろうか。それは「自由度」の点で、電子媒体が紙に劣ることによるものだと考える。本を読む行為には自主性が含まれている。読書の自主性には自由度が高いことが望まれるからである。

#### (4) ITの怖さ・思考能力の低下

インターネットで膨大な情報が得られるようになったことでは、悪い面も存在する。それこそが恐ろしい若者の思考能力の低下である。例えば、インターネットから丸々コピーアンドペーストしてレポートを作成してくる学生である。簡単にコピーがとれるため、コピーを取っただけで、なんとなくそれを理解した、読んだ気になってしまう。考えたみたくない気がするだけで、実際は何も考えていない。そこにある情報はすべて自分のものになったと錯覚してそれ以上深く考えない。彼はこういう状態を「IT病」と名づける。

#### (5) 江戸川大生の読書の自主性はあるのか

他人に強制されて読もうが、自発的に読もうが、人間が本を読む行為をとるときは、自主性を持っている。文字の配列を認知し、語の形象を識別しながら、意味を心内に構成して、文から文章へと理解し、読み進んでいく動きは読者自身のものである。もし、動機において他人に薦められたり、強制的に読まされたとしても、読書行為をとるときには自主性をなくしては成立しないのであるから、自発的な姿勢で臨むならいっそう積極的な読みになる。

また、自主的な読書の問題として、読み方の自由性がある。自分の目的・必要・興味にしたがって、自由に読むのが読書の本来の姿である。読み出してそれに合致しなければ別な本を探せばよい。無理して最後のページまで読む必要はない。面白そうなところを「拾い読み」してもよい。必要とする箇所を探し出すために「走り読み」してもよい。ある部分だけを「精読」してもよい。感動し

た本を繰り返し「再読・三読」してもいい。途中で投げ出してもいい。自由に自分の意思によって読むところに自主性が成り立つのである。

江戸川大生と神保町来街者との違いが大きいのが読書の自主性である。「本とは何か」という自由回答覧への記入を比較してみると、江戸川大学生で最も多かった回答が「情報を得るもの」と「暇つぶし」である。神保町来街者においては、「なくてはならないもの」と感じている回答が多い。本が好きで本を読むという自主性の存在が見受けられる。これに対して、江戸川大学生は、確かに「楽しみ」という回答もあるが、大方は課題や宿題のために使うものが本であり、情報を得るために使うのが本であり、暇を潰す道具が本である側面が強い。そこには自主性があるだろうか。「情報を得る」という行為にだけ本を使っている学生があまりに多いことが問題である。現代では、「情報を得る」ことにもっとも便利で早い媒体「インターネット」があるからだ。将来的に学生の活字離れが進行するとしたら、「情報を得る」という行為にのみ本を活用する学生が急速に普及する「インターネット」という実に便利な媒体に偏ってしまうという原因が考えられる。「本を読むことが好き」と答えた学生は多い。しかし、それは「嫌いではない」というていどのものだろう。学生の読む本がなぜ「漫画」「雑誌」に偏るのか、それは、「暇つぶし」「情報を得る」＝「漫画」「雑誌」だからではないだろうか。

## (6) 本のこれから

我々の中に、本を読むのに頭を使ったり、想像力を働かせたりする習慣が、しだいに薄れてきつつあるということが、現代の活字離れ、本嫌いの原因かもしれない。読み書き能力だけでは、本は読めない。物語であれ、哲学論文であれ、読む側でたくさんのことを想像したり、読み込んだりしないと本は読めない。それが面倒くさい、読む側が払う労力はできる限り減らしてほしいと感じる傾向がかなり強くなってきていると思う。その結果、読者に対する要求量の大きい類の本から順々に売れなくなってしまふ。つまり、「思考能力の

低下につながる」(津野海太郎『オンライン読書の挑戦』)。

現代は情報化社会と言われていて、すさまじいスピードで情報と情報が行きかう世の中だ。本はそういった最新の情報をどんなに早く提供しても、インターネットの最新情報には勝てない。

本とは言葉をはじめとする人間の表現「ドキュメント」の伝達手段として、人類が生み出した思考の入れ物「記憶装置なのだ」。洞窟の絵から、石盤、巻紙などから冊子体が変わって言った。思考や感情を記録し、広める優れた方法として、現在の本の形になった。しかし、現在その入れ物は「記憶装置」の本ではなく、「記録装置」であるコンピュータに変わろうとしている。

人間は想像しながら読み考える。本の本質は「記憶装置」であり「記録装置」ではない。人の思考がつまっていて、人の心に伝わるものだ。神田神保町、江戸川大学、多くの参考文献、実際に自分の足と頭を使って考えてみた結果、本は伝統、文化として人々の心にしっかりと根付いているということが分かった。「記憶装置」としての本は、いまや人々に「親しみ」「楽しみ」「生きがい」といった感情を抱かせるまでに成長した。人それぞれがちがっても、心の中に特別な思いがある限り、冷たいコンピュータに完全支配されるとことは考えにくい。

本がなくならないためには、無論愛着だけではだめだ。これから先、ITは進化して、時代は更にITに染まると考えられる。それでもやはり人間にとって、本を読み、本から学ぶことは大切だ。そのための読書教育を展開しなければならない。本を読んで、内容を理解できただけで終わるなら、読書に親しんだとはいえない。確かに国語教育の中の読書指導には、読みへの教育がしてあり、用意された一つの正答へ到達させるための正確な読みはできるようになるだろう。しかし、正答以外の個性的な読みの解釈は理解されないのだ。これでは、受験用の、またはテスト適応への読みのタガにはめられてしまい、読み手主体の個性的な読みや創造的な解釈が殺されてしまうのだ。読み手の解釈は正答、誤答の対立する概念ではない。読



書指導は本と読者の連続する過程として「読むこと」の指導を展開していかなければならない。

ITにより完成された空間、ディスプレイにはすべてが表現されている。そこには私たちの思考が入り込むことは少ない。想像をふくらませるには、活字の本が必要である。

## おわりに

神田神保町の来街者は、読者の中の読者である。彼らと江戸川大学生を比較して差を強調するのは欠点の誇張であるとも思える。むしろ、神保町のデータは目指すべき目標と考えたい。篠田君による問題の発見は、「楽に現象」と「IT病」である。パソコンひとつで何でも調べられる便利さで、インターネットからダウンロードして切り張りしてレポートを作成すると、その安易さに慣れて、考えることをしなくなるという体験と、現実の調査結果である学生がほとんどマンガ・雑誌しか見ないという現実と結び付けて考察した。

この卒業論文で、江戸川大学の図書貸出数の低さと、パソコン1人1台配布という学習環境が関係あるだろうかという疑問が新たに生じることとなった。卒論発表の場では、「本学の教育方針は、学生がどんどんものを考えなくすることになるの

か」という突っ込んだ質問が提起された。その場では解決案は得られないものの、篠田君の卒論プレゼンテーションの結論は「ITに支配されない脳を創る」という提言で結ばれている。また、そのためには、本が必要であると彼自身が結論している。

## 《注》

- (1) 江戸川大学総合情報図書館に過去5年間の貸出冊数を出してもらった結果、年々低下している傾向が表1のようにみられた。貸出総数の減少動向に対して、学生総数はこの5年間では、増加しているはずである。

また、江戸川大学学生の図書の借出状況を調べたものが下記の表2である。近隣の大学と比較して、貸出冊数は低い方である。

表1 江戸川大学学生貸出冊数の動向

年 度	学生貸出総数
1999年	23,089
2000年	19,692
2001年	15,686
2002年	15,860
2003年	18,327

出典：江戸川大学総合図書館調べ

表2 図書貸出数の大学間比較

2002年

	奉仕対象学生数	学生貸出者数	貸出者数比率	貸出点数	学生一人あたり点数
江戸川大学短大総合情報	1,979	1,800	0.91	2,800	1.41
平成国際大学	1,300	1,555	1.20	3,300	2.54
中央学院大学	4,423	—	—	19,900	4.50
帝京平成大学	5,058	4,290	0.85	6,900	1.36
東洋学園短大流山	1,155	2,584	2.24	5,000	4.33
麗澤大学	3,325	14,503	4.36	35,900	10.80

2003年

	奉仕対象学生数	学生貸出者数	貸出者数比率	貸出点数	学生一人あたり点数
江戸川大学短大総合情報	2,027	—	—	5,000	2.47
平成国際大学	1,402	—	—	4,000	2.85
中央学院大学	4,135	—	—	25,000	6.05
帝京平成大学	4,765	—	—	7,000	1.47
東洋学園短大流山	1,239	—	—	5,000	4.04
麗澤大学	3,254	—	—	39,000	11.99

出典：「日本の図書館（統計と名簿）2002」, 「日本の図書館（統計と名簿）2003」

## 参考文献

- 篠田卓也 卒業論文『現代学生の本離れ』江戸川大学  
江戸川大学社会学部経営社会学科大内ゼミナール『読  
書に関する調査報告－神保町編－』2003年  
江戸川大学社会学部経営社会学科大内ゼミナール『読  
書に関する調査報告－江戸川大学編－』2003年  
歌田明弘『本の未来はどうなるのか』中央公論新社  
2000年  
滑川道夫『映像時代の読書と教育』国土社 1979年  
毎日新聞社『読書世論調査：2001』2001年  
毎日新聞社『読書世論調査：2000』2000年  
(社)日本図書館協会『日本の図書館－統計と名簿－  
2002』  
(社)日本図書館協会『日本の図書館－統計と名簿－  
2001』